Fukushima National College of Technology

太宰治の習作に於ける〈皮膚〉の表象
－弘前高等学校時代の作品から－

A study on the representation of skin described in Osamu Dazai's earlier works

（平成17年9月受理）

＊高橋宏宣（TAKAHASHI Hironobu）

Abstract

Osamu Dazai wrote three pieces : "Mata-Wo-Kuguru" "Karera-To-Sono-Itoshiki-Haka" "Awarega" when he was a student of Hirosaki senior high school. Those works wewe his etudes. This airticle deals with the discourse of those three works and brings out the representation of skin described in Osamu Dazai's earlier works.

1 はじめに

津島修治は一朝にして〈太宰治〉となり、文壇の脚光を浴びたのではなかった。津島が〈太宰治〉の筆名を用いて最初に発表した小説は、昭和八年二月一九日付「東奥日報」日曜特集版付録「サンデー東奥」二〇三号に「乙種懸賞創作入選」として掲載された「列車」である。[1] 以後、太宰治の署名のもとに書き継がれていった作品は、第一創作集『晩年』（砂子屋書房、昭和11・6）に所収され、生への不安をモチーフとした作品や、自意識の様態をメタフィジックに描き出していく実験的手法を用いた作品の集成として結実していくことになる。

「列車」発表以前、太宰治は本名の津島修治のほかに、いくつかの筆名を用いて作品を発表している。習作期である。その間の作品は、青森中学二年在学時に書いた「最後の太閤」（青森中学校「校友会誌」三四号、大正14・3）に始まり、東京帝国大学文学部仏蘭西文学科一年在学中の「学生群－第四回－」（「座標」、昭和5・11）に終わる。太宰は生前、習作期に発表した作品を、刊本に収録することはなかった。だが、このことは太宰が習作期の作品を截然と自らの文学的営為から切り離したということではない。『晩年』劈頭におかれた「葉」の断章には、習作期の作品から幾多の引用がなされており、それは「いくらかの例外を除いてほぼ執筆の順序にしたがって配列」され、中学の時に作家になることを決意したのち太宰治の筆名で作家として自立するまでの「芸術の思い出」としての側面を持っているのである。[2]

習作と「列車」以降の作品と。そこには連続と切断の両面が当然ながら存在する。太宰が習作期の作品の言説、あるいは習作期に試みた手法から、何を抽象し、何を捨象したのか検証する手続きは、〈太宰治〉の名のもとに作品を紡いでいった創作上のしるべを解き明かす重要な手掛かりを我々に与えてくれるだけでなく、死に至るまでの文学的営為の力動の一端を、その始発点から俯瞰する視点をも我々に供してくれるはずである。

青森中学時代に書かれた作品には、〈醜い顔〉の主人公が登場する。中学

＊ 福島工業高等専門学校　一般教科（国語）　（いわき市平上荒川字長尾30）

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

時代の作品は、「優劣の感情を核とし、身体的欠陥や顔の醜さや人間存在の不安定さなどをからませて展開しているものが多い」[3]く、「優越感の消滅によって、人間存在の不安定さがあらわになるという主題」に貫かれている。また、中学・高等学校時代の習作を通してみられる一つの典型に、登場人物が強い自尊心を持ち、その自尊心ゆえに、疎外感や淋しさを感じるという作品構成上のパターンがある。[4]

ところで、太宰治の作品には、身体に言及した箇所が多数現れる。この傾向は既に中学時代の習作に認めることができるのであり、太宰は身体の記述を一つの支点として作品を構築していった作家であるといえよう。作中人物は「貧しい身体」（「東京八景」）の所有者であるが、かといって健康な肉体を渇望しているわけではない。身体の貧しさゆえに生ずる苦悶が、悔悟や諦念の契機を導きだし、やがてそれは祈りや希望を見出すよすがとなっていくのである。

太宰の描く身体には、作品構築の戦略上、二つの傾向を見出すことができる。ひとつは、作品の言説として、他者の視線に曝され、まなざしの対象となる〈顔〉や〈皮膚〉が多く採用されていることである。ふたつ目は、〈顔〉や〈皮膚〉といった部位が記述される作品が、ある特定の時期に集中して書かれているということである。

本稿は、太宰がこの戦略を、習作期、特に旧制弘前高等学校時代の創作を通して獲得していったものと考え、その過程を検証するものである。本稿では〈皮膚〉の記述に限定し、「股をくゞる」「彼等と其のいとしき母」「哀蚊」を取りあげ、作品中の皮膚の表象および皮膚をめぐる言説を考察し、習作期に於ける太宰の思考形式の変遷を辿ることとする。

2　「股をくゞる」

「股をくゞる」（「細胞文芸」、昭和3・7）は、韓信の股くぐりの故事に題材をとった作品である。韓信は漢の高祖に仕えた武将で、張良、蕭何とならぶ漢初の功臣のひとりであり、『史記』巻九二淮陰侯列伝、『漢書』巻三四韓彭英盧呉伝がその消息を伝えている。

太宰の「股をくゞる」では、冒頭で語り手が韓信を「信」と記し、以後「彼」という人称でその一日の言行を物語っていく。一篇は、途中で「作者」が登場して「短篇『股をくゞる』」の終わりを告げる。そして「作者」が「蛇足」と称して付け加えた部分で、韓信が大将軍になる決意をする場面が描かれるという構成になっている。韓信が洗濯をしている老婆から粟飯を与えられたり、町で「屠殺場の青年等」に臆病を罵られてその股下をくぐるという「作者」登場以前の筋は、おおむね『史記』の記述に則っていると言っていいだろう。

太宰が大きく書き換えたのは、韓信が老婆や青年等に対して激しい「屈辱の恨み」を抱き、この恨みが後に将軍になる意志を打ち立てることになったという部分である。これは、『史記』の記述と大きく異なり、若き日の韓信の人物造形の根幹にかかわる変更になっている。

かかる変更が生じたのは、太宰が韓信を「偉大なる自尊心」の持ち主としたからである。それと対をなす老婆や青年等から受ける「敗北」や「屈辱」は、「偉大なる自尊心」が太宰によって書き込まれた時すでに、結末として繰り込まれていたのだと言ってよい。

「股をくゞる」で特徴的なのは、韓信の自尊心が、皮膚病とパラレルに語られている点である。作品冒頭、「信」が「疥癬」を患っていることが詳細に描かれる。

> 疥癬にむくんだ彼の手の甲から、ぷす〳〵わいて出る、膿のやうに黄いろく濁つた汗を、彼は手の輪廓がぼうつと成る迄ぢいと見詰めて居た。腐つた肉の底に澱んで居るなまぬるい膿が、幽かに白く透き通つて見える小さな貝殻のやうな物は、彼の指の股から手頸にかけて、無数にべたべた食つ附いて居た。若し彼の手の厚い皮をげろりと剥いだならば、きつと扁虱に似た、血太つてごろ〳〵して居る虫が、ぎつしりうようよ詰まつて居るのが見えるに違ひ無いと、彼は何時も考へて居た。彼は左手の甲の殊に大きく張れ上つて居る紫色の貝殻を、右手の人差指で思ひ切り強くぐつと押しつけた。血の交つた膿がどろりと出て汗と一緒になり、もぞり〳〵手の甲を這ひ流れ始めた。

「疥癬」はヒト疥癬ダニの感染によっておこる皮膚病である。引用文中にあるように、指のあいだや腕などを侵し、膿疱化する。その中には虫体・虫卵・糞があって、激しい痒みを生じ、接触を通して他人に伝染していく。[5]

『史記』巻九二淮陰侯列伝、『漢書』巻三四韓彭英盧呉伝には、韓信が「疥

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

癬」であったという記述はない。そこで、太宰が韓信を「疥癬」に罹っている者とし、その患部である「手の甲」を詳細に記述していることの意味を、作品に即して考えてみることにしよう。

「股をくゞる」で、洗濯する老婆から粟飯を与えられた「彼」は、空腹のため「其の粟飯に対する食慾を激しく感じ」ながら、粟飯を老婆に投げ返す。「彼」は「『無料』で他人に物を呉れる馬鹿者」の存在を信じない。「彼」は老婆が無償で粟飯を与えることによって「『施し』の快楽」を味わおうとしているのだと解し、老婆の「彼」に対する侮蔑を嗅ぎ取る。「論究癖」によって、「彼」は老婆が自分に対してとった態度の理由を問わずにいられないのであり、老婆の「目色」や「言葉」から老婆の底意を量りとろうとする。「彼」は、老婆が自分と「似たりよつたりの貧乏人」で、「彼」より優位な立場にあるのではないことを確認すると、自らの「つまらぬ興奮」を苦笑し、老婆に粟飯をねだる。

しかし、老婆が再び粟飯を与えるさまは、「彼」にはやはり「傲慢」にしか感じられないのだった。その「傲慢」に我慢がならない「彼」は「仕返へし」を思い立つ。だが「論究」に浸って「仕返へし」の「毒々しい幻」を思い描いている間に老婆は去ってしまい、老婆への「復讐」は果たされず、「敗北」だけを味わうことになる。

老婆への「復讐」。それは老婆の股をくぐって驚かせてやることであったことが結末で「彼」に思い出され、「屈辱」を一層強く感じることになるのだが、老婆が立ち去った直後の場面では、なぜか「復讐」の内実が何であったか「彼」には思い出すことができないのである。「薄き擽つたい幕」が「彼」の思考を遮るからであった。この「幕」によって隔てられているものは次のように語られる。

－何でも、ほの温い、どろ〳〵したものであつた。桃色で、どろ〳〵したもの……そんなやうな気がするな。

「幕」が隔てているものの内実が何であったのか「彼」には判然とせず、また語り手も明示しない。こうした朧化した表現のうち、「どろ〳〵したもの」が「彼」の「手の甲」に巣食う「疥癬」から湧き出す「膿」の濁りと重ねられていることは容易に察せられる。

「彼」の〈自尊心〉の内実はどのようなものであるのか。それは、町で「屠殺場の青年等」に取り囲まれた箇所で明かされる。

この青年等は、或る時には又殆ど常識で考へられない程の無作法も平気でやつて除けたりして居た。だがこれも、青年には必ず属物である可愛らしい群衆酩酊心理の故だと思つて、決して深く気に止めぬ方がいゝのである。彼は勿論これ等の青年に満腔の同情を寄せて居た。愛してさへ居た。だが彼はこの青年等の無遠慮に依つて彼の自尊心を傷けられる事が恐ろしかつた。彼も亦、世の多くの臆病者がそうであるやうに偉大なる自尊心を持つて居た。それだから今彼はこの礼節を弁ぜぬ、貧困の青年等に取り巻かれて、ほと〳〵当惑して了つたのである。（傍線・引用者）

「彼」の「偉大なる自尊心」とは、「論究」によって他者と自己とを引き比べ、他者に批評を加えられる自分、つまりことばで他者に優越する自己像を作り出し、庇護者たりうる立場を仮構することを通して生み出されたものであった。青年等に「満腔の同情」を寄せ、「愛してさへ居」る「彼」の胸の内にあるのは、青年等への憐れみであり、また語り手も「彼」に寄り添うように、青年等の「可愛らしい群衆酩酊心理」を「決して深く気に止めぬ方がいゝ」と、「彼」の内面を補完していく。

だが、ことばで仮構した「彼」の「偉大なる自尊心」は、他者からみれば虚妄にすぎない。「彼」は無為徒食の身であり、寄食していた家からは「今朝」追い出されたばかりである。老婆は粟飯を与え、青年等は「彼」の度胸をためす。いずれも「彼」への侮蔑である。「彼」の自尊心が傷つきやすいことは「彼」自身がいちばんよく分かっているのであり、だから「彼」は他者との交渉で「臆病」にならざるをえないのである。

「疥癬」という皮膚の病は、韓信が他者への優越を意識しながら、それゆえ「敗北」や「屈辱」を味わわなければならないという、相反する内面の煩悶の、肉体の表皮への現出なのである。「疥癬」による「腐った肉」や、そこに巣食っている「虫」、流れ出る「膿」は、いずれも韓信自身どうすることもできない「自尊心」の隠喩として描かれている。とりわけ「膿」は、「偉大なる自尊心」を持っていながら、他者とのあいだに屈辱的な関係しか築くことができないことからくる「自尊心」の屈折を擬したものである。それは、「膿」の流れ出ている部位が手という、他者との交渉を直接に媒介する箇所

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

であることにも暗示されているのであって、自尊心ゆえに他者に受け入れられない優越と挫折の内訌の表出として「膿」が象徴的に描き込まれていると言えよう。

「股をくゞる」の皮膚病は、のちに太宰が描いていくことになる〈皮膚〉の作品中での機能に照らしてみれば、内面の外界への一方通行の露出という限定されたものにとどまっている。〈皮膚〉が、他者のまなざしの対象となり、接触によって他者と交渉を持つ場となるには、もう少し待たねばならない。

3　「彼等と其のいとしき母」

「彼等と其のいとしき母」（「細胞文芸」、昭和3・9）の竜二も「ひどい自尊心」の持ち主である。

彼はもともと、ひどい自尊心を持つて居るのだが、其の自尊心に到底追従して行く能力の無い彼の肉体のお蔭で、彼は事実悲惨な思ひをして居た。

「ひどい自尊心」を容れるに不十分な「肉体」。「肉体」の不十分さは兄との比較に於いて自覚されるのだが、自尊心と肉体の不均衡から生じる「悲惨な思ひ」は、この作品に於いても、竜二の皮膚の失調というかたちで表皮に現れてくる。

七年前、竜二の一家は東京府庁に勤めていた父を亡くす。東京での生活に適応できないでいた母は、二人の子供を連れて、「父の故郷」である「東北の寒村」に帰ろうとした。竜二は母の言に従って帰郷するが、「美術学校」を卒業し東京で働き始めていた兄は仕事を続けるため東京に残り、「家からの僅かな仕送り」と「石膏細工を売つたそこばくの金」で暮らしている。

竜二の家族は、皆強い自尊心の持ち主である。兄も気が強いが、母は兄以上の気の強さを持っていた。父の死後、一家の帰郷をめぐって兄は母と「ひどい喧嘩」をし「親子は心持ち悪く別れ」たのだった。その後、兄が腎臓病で「重態」となっても母は上京せず、母が盲腸炎で「死ぬ思ひ」をした時に兄が帰郷しなかったため、「両方の心持がこぢれ」てしまっている。だが、この度の兄の腎臓病の悪化に際しては、母が竜二と共に上京し、東京郊外の兄の借家で一家三人しばらく暮らすことになったのだった。

兄は母に「仕事の邪魔」になるから帰ってくれと言う。竜二も「兄との間が一日一日と気不味くな」るのに「閉口」し、母に帰郷をうながす。しかし母は帰ろうとしない。母の死が近いことは結末で明かされることになるのだが、帰郷したいのにそれができず、母の真意が分からないまま「尊大」ぶる兄のもとにあって、竜二の心情は、母への愛情と軽蔑、兄への親しみと反発のあいだを揺れ動く。

竜二の自尊心は、「生れた時から俺は不仕合せだつた」という憂い、「一生涯こんな憂鬱と戦ひ、そして死んで行くといふ事に成るんだな、と思」う感傷、そうした「己が身がいぢらしくもあ」るという自己愛に縁取られている。竜二は「見栄坊」でありながら「意気地の無い奴」であり、「股をくゞる」で「偉大なる自尊心」を持ち他者への優越を意識しながら「臆病」な韓信と同系列にある人物であると言えよう。

この竜二にある日変化が訪れる。

竜二は或朝ふと台所の小さな鏡を覗き込んだら、はたけが顔一面にほこほこ吹き出て居た。殊に口の周囲は真白になつて居たから老人見たいで可笑しかつた。はたけには歯みがきの粉がいい、と誰だか言つた事があるやうな気がして毎晩こつそり歯みがきの粉を顔になすり附けて寝る事にした。

「はたけ」は顔面に白く粉をふいたような円形の斑紋ができる皮膚病で、思春期前の男児に多くみられる。

「彼等と其のいとしき母」での皮膚病は、「股をくゞる」のそれとかなり趣を異にしている。いささか唐突とも思える「はたけ」の出現は、はじめ竜二自身の視線に「老人見たいで可笑し」く映り、たいして気に留められていなかった。だが、母や兄に顔を見られ、まなざしの対象となった時、竜二が感じたのは、「余りに無智な判り切つた嘘」をついてしまった自分への恥ずかしさであった。

竜二はそこそこに食事を終へて、つくづくと台所の鏡に顔を写して見た。はたけが悪魔のやうに白く見えた。恥しさに身体がぞくぞくして来た。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

兄に見つけられた事も恥しいには違ひないが、余りに無智な判り切つた嘘を言つたのが、何にも増して恥かしかつたのだ。

「股をくゞる」から約二ヶ月後に脱稿された「彼等と其のいとしき母」では、皮膚をめぐる言説に変化が生まれている。ここでの「はたけ」（皮膚病）は、ある日なんの前触れもなく出現して他者のまなざしにさらされ、見られる者の心の動揺を誘引する契機として作品の中に描かれている。竜二の目に「悪魔のやうに」映る白い斑紋が現れた後、竜二と兄との関係は「一日一日と気不味くなつて行く」ようになる。そして竜二はついに「気が変になるかも知れない」ところまで追いつめられていくのである。

「彼らと其のいとしき母」では、皮膚の失調が、作中人物の内面の揺らぎの契機となり、情況と心理の函数として描かれる。そして「哀蚊」では、皮膚の機能が極大化されて描かれることになる。

4 「哀蚊」

「哀蚊」（「弘高新聞」第六号、昭和4・5・13）は昭和四年四月二五日に脱稿したと推定され、[8]当時太宰治は官立弘前高等学校三年に在籍中であった。「哀蚊」は後に、「地主一代」の第一回掲載「序章花火供養」（「座標」、昭和5・1）の中に、「県下で一二を争ふ大地主となつてる私」が「K新聞社」に応募して当選した小説として、作中作の形で引用される。さらに「葉」（「鶴」、昭和9・4）の断章に引用され、「葉」の語り手は、「彼は十九の冬、「哀蚊」といふ短篇を書いた。それは、よい作品であつた」とし、「彼の生涯の渾沌を解くだいじな鍵となつた」と述べることになる。

初出「哀蚊」は、「私」をかわいがってくれた婆様への追憶と「私」と婆様の親密な関係の記述を主軸とし、特に忘れることのできない二つの出来事－婆様が「哀蚊」について語ってくれた夜のこと、姉の祝言の夜にその初夜の寝室を覗く幽霊を見たこと－が語られる。

婆様は「私」の家を「百万長者」に伸し上げた人物であったが、「縁遠」かったため、「私」の父母は婆様の「ほんとうの御子」ではない。つまり、「私」と婆様は血の繋がりがないのだが、「私」は「幼い時からこの婆様が大好き」だったと回想する。乳母から離された「私」は「すぐ婆様の御懐に飛び込んで了つた」のであった。婆様が好きだった理由として、「私」は母の「病身」を挙げ、「余りかまふて呉れなかつた」からだと語る。だが、「四六時中離座敷のお部屋に許り居」る婆様のそばにいて、三日も四日も母親に会わないことが珍しくなかったほど一緒にすごしたという婆様への傾斜の内実は、十分に考えてみる必要がある。

「私」の婆様への讃辞は、その〈肌〉を褒めることから始められる。「私」は自分の「婆様程お美しい婆様もそんなにあるものでは」ないと言う。その美しさとは、〈肌〉の美しさと等価である。婆様の年老いてなお「輝く程お綺麗な素肌」は、死後すら変わらなかったように「私」には見えたのであった。「昨年の夏」に亡くなった婆様の「御死顔」は、「凄い程美しい」もので、その「白蠟の御両頬」には「夏木立の影も映らむ許り」であったと「私」は語る。死してなお美しい〈肌〉は、「夏木立の影」を図として浮かび上がらせる地の白さとして強調される。

青森中学時代の習作から現れる醜い容貌、それゆえに家族からの疎外感を味わい、劣等意識を抱くにいたる醜悪なる容貌と対極にある系譜がここにおいて初めて立ち現れる。美しいものとそれに帰属することで得られる安心のモチーフである。美しい〈肌〉の持ち主は「私」の庇護者であって、その〈肌〉にくるまれた時の全き安心感は、「忘れることが出来ない」「哀蚊の御寝物語」として次のように語られる。

『秋まで生き残されてる蚊を哀蚊と言ふのぢや。蚊燻しは焚かぬもの。不憫な故にな』

あゝ、一言一句そのまんま私は記憶して居りまする。婆様は寝ながら滅入るやうな口調でそう語られ……そう、そう婆様は私を抱いてお寝になられる時は、きまつて私の両足を婆様の太股の間に挟んで温めて下さつたものでございます。或寒い晩なぞ、婆様は私の寝巻を皆お剥ぎとりになつてお了ひになり、真裸に致しまして婆様御自身も輝く程お綺麗な素肌をおむき出し下さつて、私を抱いてお寝になり、お温めなされて呉れた事もございました。それ程婆様は私を大切にして居らつしやつたのでございます。

「私」は、哀蚊の物語を聞いた夜のことは夢ではないと断じ、婆様の「お美しい御めめ」のことをいう。婆様は「お美しい御めめ」で「私の顔をつく

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

づくと見まもり」ながら自身のはかなさを哀蚊になぞらえたのだった。婆様の「御めめ」は「お美しい」がゆえに「私」を惹きつけ、「私」に見つめ返される対象となる。婆様と「私」のあいだの、眼差し、眼差し返した記憶とは、〈家〉の興隆の中心に結わえられていた自分への懐古であり、父母との血縁の情愛とは別の、「百万長者」の〈家〉という権威へ帰属していた自己の確認である。

婆様が「私」を抱いて寝る時は「きまつて私の両足を」「太股の間に挟んで温めて下さ」り、寒い晩には「私」を裸にして「輝く程お綺麗な素肌」をむき出して抱いて温めてくれたのだった。肌と肌とが直に触れ合うことは、「一生鉄奬（かねぬ）」をつけることのなかった婆様の「素肌」という秘められた美しさを知ることである。婆様の肌に触れそれを見ることは、この家で「私」だけに許されていたのであり、このことは、婆様の美しさを記述しうるただ一人の語り手としての「私」の特権へと転化される。だから「私」は、大切にされていたと受動態で語るのではなく、「婆様は私を大切にして居」たと能動態で語るのである。

「哀蚊」に於ける〈皮膚〉をめぐる言説は、「股をくゞる」「彼等と其のいとしき母」と明らかに異なっている。「哀蚊」の〈皮膚〉は、まなざしの対象となり、かつ接触を介して、自己と他者との関係を確認する場なのである。婆様の〈肌〉は、そこに包まれることによって〈家〉への帰属を意識する、謂わば「私」の自己同一性を保証してくれる場なのであった。

5　結び

以上、太宰治が弘前高等学校時代に発表した三作品の〈皮膚〉の表象および〈皮膚〉をめぐる言説を検討してきた。そこでは、〈皮膚〉が内面の表皮への露出であったり、その失調が作中人物の心理と情況の函数であったり、〈皮膚〉が自己同一性を支える場なのでもあった。〈皮膚〉をめぐる言説は弘前高等学校時代に発表した作品に多くあらわれるようになり、太宰は〈皮膚〉をめぐる言説を操ることで、自己と他者との関係を記述していく方法を獲得しようと試みていたと考えられる。

習作期のこうした試みは、「列車」発表以降の、いわゆる前期の作品の方法として抽象されていく。『晩年』に所収された作品には、〈皮膚〉または〈肌〉の記述が多数散見されるが、それらは肉体の一部や感覚器官としてだけではなく、例えば「玩具」に「私は皮膚から言葉を聞いた。」とあるように、行為主体が世界を認識していく観念の場へと更なる転位を遂げていくことになるのである。さらに中期では、皮膚病をひとつの契機として他者との関わり方を捉え直していく作品（「美少女」「畜犬談」）を書いていくことになるのであり、それは「皮膚と心」（「文学界」昭和14・11）を一つの極点として結実していくことになる。

では、なぜ太宰は皮膚にこだわったのか。「思ひ出」の「二章」（「海豹」昭和8・6）には、中学のころ吹出物に悩まされ、「吹出物を情欲の象徴と考へて目の先が暗くなるほど恥し」く、「いつそ死んでやつたらと思ふことさへあつた」ことが記されている。また『玩具（あづみ文庫）』（あづみ書房、昭和21・8）の「あとがき」では、「皮膚と心」の執筆時を振り返って、「私は男のくせに、顔の吹出物をひどく気にするたちだつた」と述べている。太宰治固有の生理感覚が、自身の「吹出物」体験を通して言語化されていったわけだが、重要なのは、太宰が感覚という個別的なものを、言語という普遍的なものへと抽象化することに意識的であったということである。太宰は〈皮膚〉の言辞を用いて情況を作り出し、そこで主体と他者との関係性を問うていったのであった。

そうした太宰の試みの始発を習作期に確認しようとしたのが本稿の趣旨であった。『晩年』所収の個々の作品に、こうした習作期の手法がどのように抽象されていったのか、その痕跡を個々に辿る検証作業が、今後の課題として残された。

注

＊1　現存する資料で確認できるもののうち、津島修治が「太宰治」の筆名を初めて用いたのは、「田舎者」（「海豹通信」第四便、昭和8・2・15）という随想である。

＊2　鳥居邦朗「習作のもつ意味―太宰治」（「解釈と鑑賞」、昭和35・10）に拠る。

＊3　山内祥史「習作の意味―「地図」までの検討を通して」（『一冊の講

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

座　太宰治』有精堂、昭和58・3）

＊4　安藤宏「〈自尊心〉の二重構造－旧制中学時代の太宰治－」（「芸術至上主義文芸」23、平成9・12）では、自尊心の実体が既に中学時代の習作に「確実に一つのモチーフを形作りつつあ」り、強い自尊心とその対極をなす淋しさの両者を往還する振幅が習作を貫く極めて重要な核をなしていたことが指摘されている。また、同氏「「哀蚊」の系譜　習作時代の太宰治」（「太宰治」4、洋々社、昭和63・7）では、太宰の習作で「醜悪↓疎外の図式は常に肉親へのすねと甘えの指標として表れること」が指摘されている。

＊5　『ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典1』（TBSブリタニカ、平成3・10）の「疥癬」の項に拠る。

＊6　『ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典2』（TBSブリタニカ、平成3・10）の「顔面単純性粃糠疹」の項に拠る。

＊7　山内祥史「解題」（『太宰治全集第十二巻』筑摩書房、平成3・6）に拠ると、「股をくゞる」初出本文の末尾には「（三、六、十三）」、「彼等と其のいとしき母」の初出本文末尾には「三・八・九」とある。いずれも脱稿日と推定される。

＊8　山内祥史「解題」（『太宰治全集第十二巻』筑摩書房、平成3・6）に拠る。同氏「〔作品推敲のあと〕哀蚊」（『太宰治（群像日本の作家17）』小学館、平成3・1）は、太宰が青森中学四年在学中の昭和二年一月に「哀蚊」の初稿が書かれていた可能性を指摘している。

＊9　拙稿「転位する〈皮膚〉－太宰治「皮膚と心」論－」（「文芸研究」一五五集、平成15・3）参照。

※　太宰治の作品本文の引用は、第一〇次筑摩書房版『太宰治全集』に拠った。

NII-Electronic Library Service